特集

外傷死ゼロへの挑戦

日本でJATECが開始されてから20年以上が経過し，外傷初期診療を学習し標準化する体制が整えられてきました。また，CT検査や血管造影検査，そしてハイブリッドERといったハード面の進歩と，JETECなどによる外傷蘇生・輸血戦略，チーム医療の普及と深化により，私たちの外傷診療は間違いなくブラッシュアップされています。しかし，依然として「防ぎ得る外傷死」は“ゼロ”にはなっていません。

外傷死“ゼロ”への挑戦。それは，無謀なことと思われるでしょう。しかし，まず“ゼロ”を目指さなければ，外傷死を減らすことはできないのではないでしょうか。例えば，悪性腫瘍の領域では，“ゼロ”を目指した研究や治療が盛んに行われ，外科的手術，化学療法，放射線治療，ゲノム医療など多角的な治療が積極的に進められています。世界有数のがんセンターであるUniversity of Texas MD Anderson Cancer Centerのロゴを見てみてください。“Cancer”の部分にはっきりと赤で取り消し線が引かれています。彼らが本気でがんの根治・根絶，すなわち“ゼロ”を目指していることの表れといえるでしょう。私たちも負けていられません。ここから本気で，外傷死“ゼロ”に挑戦しませんか？

そこで今号の「救急医学」では，「外傷死ゼロへの挑戦」をテーマに掲げた特集を企画しました。とくに外傷死に直結し得る体幹部外傷を中心に，外傷診療のさらなる向上を目指した最先端の取り組みを，System，Strategy，Tactics，Management，Educationという5つの観点から取り上げます。

原稿は，日本の外傷診療をリードする先生方と，これからの外傷診療の中心を担うであろう気鋭の先生方に，それぞれの理想論や「こうしたい」「こうなってほしい」という熱い想いも込めて，ご執筆いただきました。医療体制や診療チームの構築から，目の前の重症外傷患者への具体的治療選択まで，広く深くキャッチアップできる特集となっています。

次世代を担う子どもたちが安心して活躍できる社会を医療からつくる。そのための大事な一歩を踏み出す「外傷死ゼロへの挑戦」が，いま，ここにあります。

【特集企画ゲストエディター】
東北大学病院高度救命救急センター／
Division of Trauma and Acute Care Surgery,
Keck School of Medicine, University of Southern California
谷河　篤